

# 「高田短期大学ディプロマ・ポリシー」到達度に関する研究 (2)

## A Study of Achievement of the Diploma Policy of Takada Junior College (2)

山 口 昌 澄

Masazumi Yamaguchi

### (要 約)

本研究においては、本学が実施している「ディプロマ・ポリシールーブリック」学生データを活用し、達成度状況の卒業年度・学年による違いや、ルーブリックの次元性に関する検討を行った。その結果、学年、学科・コースにおける達成度傾向や、各ルーブリックの概念的構造等について有意義な知見が得られた。一方で、さらなる成果実態調査・分析の必要性や、ルーブリック調査方法、教育・学修成果における向上・改善への取り組み等、今後の課題も明らかとなった。

### (キーワード)

ディプロマ・ポリシー、ルーブリック、学修成果

## 1. 問題と目的

前回報告(山口, 2023)では、「ディプロマ・ポリシー(以下「DP」)ルーブリック」2022年3月卒業生データを活用し、ポリシー達成度状況、DPルーブリックの次元性構造分析、他指標との関連分析を行った。その結果、本学学修成果やDPのあり方に関し、学科・コース間によるDP到達状況の傾向の違いや全学DPルーブリックの1次元構造の可能性等、有益な示唆が得られた。しかしデータサンプル数の少なさから、一部検証できない分析が残るなど、課題も示された。

そこで本研究では、前回報告以降に集積されたDPルーブリックデータ(2023年度3月卒業生・1年生)を加え、上記課題の解消はもとより、さらなる知見を得るため以下の分析をおこなう。

①DPルーブリック到達度に関する卒業年度・学年集団による比較<sup>註1</sup>

②DPルーブリック(全学および学科・コース別)の次元性に関する構造分析

得られた知見をもとに、今後の学修成果向上や教育改善に向けた提言もおこないたい。

## 2. 方法

### (1) 調査内容

#### ①全学DPルーブリック

本学における全学的な共通到達目標として、4つの観点と8つの到達目標(カテゴリー)が設定されている。観点Ⅰ「倫理」では「1 いのちの平等、尊厳性への気づき」と「2 生かされていることへの感謝」「3 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」では「4 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」では「5 論理的で柔軟な思考と判断力」と「6 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」では「7 主体的な行動力」と「8 他者との協働力」が含まれる。

## ②子ども学科 DP ルーブリック

本学子ども学科の到達目標として4つの観点と6つの下位カテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「倫理」では「A 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」では「B 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」では「C 論理的で柔軟な思考と判断力」と「D 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」では「E 主体的な行動力」と「F 他者との協働力」が含まれる。

## ③オフィスワークコース DP ルーブリック

本学キャリア育成学科オフィスワークコースの到達目標として、4つの観点と6つのカテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「知識・技能」では「A 知識、技能【専門能力】」、観点Ⅱ「思考・判断・表現」では「B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】」と「C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】」、観点Ⅲ「主体性・多様性・協働性」では「D 主体的な行動力【アクション】」と「E 他者との協働力【チームワーク】」、観点Ⅳ「キャリア」では「F キャリアデザイン【キャリア】」が含まれる。

## ④介護福祉コース DP ルーブリック

本学キャリア育成学科介護福祉コースの到達目標として、4つの観点と6つのカテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「倫理観」では「A 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」では「B 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」では「C 論理的で柔軟な思考と判断力」と「D 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」では「E 主体的な行動力」「F 他者との協働力」となっている。

上記①～④の全カテゴリーごとに、達成レベルに応じた記述語（レベル）が4つ設定され、評価者が合致する内容を評価・選択できるようになっている。各ルーブリックの具体的な記述内容については、前回報告（山口，2023）を参照されたい。

## (2)分析対象

分析対象【有効回答】となるデータは、以下①～③である。

①2022年3月卒業生125名【全卒業生内56.81%】…子ども学科83名【学科内64.84%】/キャリア育成学科オフィスワークコース29名【コース内42.65%】/キャリア育成学科介護福祉コース13名【コース内54.17%】)。

②2023年3月本学卒業生215名【全卒業生の内75.70%】…子ども学科172名【学科内90.05%】/キャリア育成学科オフィスワークコース26名（コース内37.68%）/介護福祉コース17名（コース内70.83%）)。

③2023年3月1年生198名【学年内79.52%】…子ども学科142名（学科内89.87%）/キャリア育成学科オフィスワークコース35名（コース内57.38%）/介護福祉コース21名（コース内70.00%）)。

## (3) データ集計方法等

データ集計については、本学が活用しているクラウド型の教育支援サービス「manaba（株式会社朝日ネット）」のアンケート機能を用いて、インターネット上から回答するよう呼びかけ回収した。教示文

として「高田短期大学を卒業するにあたり本学のディプロマ・ポリシーに示した学習到達目標にどれだけ到達しているかについてアンケート調査します。なお、この調査は高田短期大学の教育をより良くするための基礎資料の蓄積を目的として行います。回答いただいた内容は全て統計的に処理をしますので、個人を特定することはありません。ご協力をお願いします」と付した。なおデータ①についてはインターネット上のみの調査回答呼びかけ、回収し、データ②・③については成績交付時（2023年2月～3月）に直接口頭で呼びかけ、回収をおこなった。

集積データは、IBM社の「SPSS Statistics 25」を用いて分析し、欠損ケースは分析ごとに除外する形で処理をおこなった。

### 3. 結果と考察

#### (1) DP ルーブリックの達成度比較（卒業年度および学年）

##### ①全学 DP ルーブリック

卒業時（2022年3月卒・2023年3月卒）および2023年3月1年生の全学 DP 到達度状況（平均値（標準偏差））を表1に示す。

表1 全学 DP ルーブリック到達度(各群平均値(SD))

各群・人数		①2022年卒 n=125	②2023年卒 n=215	③2023年1年 n=198	群間差
カ テ ゴ リ ー	1 いのちの平等、尊厳性への気づき	3.17(.77)	3.15(.79)	2.92(.81)	①・②>③
	2 生かされていることへの感謝	3.08(.87)	2.91(.83)	2.74(.84)	①>③
	3 倫理観	3.06(.83)	3.05(.75)	2.80(.81)	①・②>③
	4 知識、技能	2.83(.79)	2.93(.73)	2.58(.73)	①・②>③
	5 論理的で柔軟な思考と判断力	2.78(.87)	2.80(.85)	2.47(.82)	①・②>③
	6 自己表現力	2.80(.92)	2.80(.86)	2.40(.82)	①・②>③
	7 主体的な行動力	2.87(.81)	2.84(.82)	2.51(.81)	①・②>③
	8 他者との協働力	3.06(.86)	3.01(.81)	2.72(.79)	①・②>③
総ポイント		23.66(5.42)	23.47(5.05)	21.14(5.00)	①・②>③

「1 いのちの平等、尊厳性への気づき」は、2022年3月卒3.17(.77)/2023年3月卒3.15(.79)/2023年3月1年2.92(.81)、「2 生かされていることへの感謝」は2022年3月卒3.08(.87)/2023年3月卒2.91(.83)/2023年1年2.74(.84)、「3 倫理観」は2022年3月卒3.06(.83)/2023年3月卒3.05(.75)/2023年3月1年2.80(.81)、「4 知識、技能」は2022年3月卒2.83(.79)/2023年3月卒2.93(.73)/2023年1年2.58(.73)、「5 論理的で柔軟な思考と判断力」は2022年3月卒2.78(.87)/2023年3月卒2.80(.85)/2023年3月1年2.47(.82)、「6 自己表現力」は2022年3月卒2.80(.92)/2023年3月卒2.80(.86)/2023年3月1年2.40(.82)、「7 主体的な行動力」は2022年3月卒2.87(.81)/2023年3月卒2.84(.82)/2023年3月1年2.51(.81)、「8 他者との協働力」は2022年3月卒3.06(.86)/2023年3月卒3.01(.81)/2023年3月1年2.72(.79)、総ポイントは2022年3月卒23.66(5.42)/2023年3月卒23.47(5.05)/2023年3月1年21.14(5.00)という結果となった。

本学では、各カテゴリーでポイント「3（総ポイント24）」を卒業時に到達すべきレベル（「到達目標」として設定し、学生へ示している<sup>註2</sup>。現状最新データである2023年3月卒業生の達成状況に着目すると、ポイント「3」以上（目標達成）だったカテゴリー「1 いのちの平等、尊厳性への気づき」「3 倫理

観」「8 他者との協働力」については、本学における建学精神「仏教精神に基づく人間形成」や教育理念（「『やわらか心<sup>註3</sup>』の社会人の育成」）に関連する内容である。本学における学修を通じそれらの精神や理念が学生へ浸透し、能力や態度等として獲得された可能性が考えられよう。一方で、学修で得た知識、技術、能力等を現実社会の中でどのように活かし発揮するかに関連するカテゴリー4～7については、到達目標に届かなかった<sup>註4</sup>。以上の結果は、傾向として前年度報告（山口，2023）でも指摘されており、本学教育活動上の今後に向けた課題と捉えるべきである。

また群間比較のため、年度・学年による1要因分散分析をおこなった。その結果、全カテゴリー、総ポイントにおいて主効果が有意となり（ $F=5.29\sim 14.06$ ,  $p<.001\sim .01$ ）、多重比較（Tukey法）の結果、「2 生かされていることへの感謝」を除き、卒業生（年度）間の差はみられず、ともに1年生より高いという結果（ $p<.001\sim .05$ ）となった（表1）。なお「2 生かされていることへの感謝」については、卒業生（年度）間の有意差はみられなかったものの、2022年3月卒業生のみ、2023年1年生より高いという有意差（ $p<.01$ ）が認められた（表1）。

以上の結果は、本学DPに基づく各カテゴリー内容が卒業までに徐々に獲得・形成される能力や態度等としていることから妥当な結果であり、本学教育活動および学修成果の有効性を示唆している。

なお「2022年3月卒」「2023年3月卒」の合算データにおける学科・コース別に1要因分散分析をおこなった結果、「自己表現力」のみ主効果（ $F=4.28$ ,  $p<.05$ ）がみられた。多重比較（Tukey法）の結果、子ども学科がオフィスワークコースより有意に高かった（ $p<.05$ ）。子ども学科の学生はほとんどが保育者を目指しており、カリキュラム上も表現系科目（音・図・体）を多く学ぶため、上記結果に繋がったものと考えられる。だが学科・コースを通じて概ね同傾向の到達状況であることがわかった。また各データ群（2022年3月卒・2023年3月卒・2023年3月1年）別に $\alpha$ 係数を求めたところ $\alpha=.91\sim .93$ と高い信頼性が示された。よって本ループリックの全学的なDP到達度評価をする上で測度指標としての妥当性・信頼性の高さを支持する結果となった。

## ②学科・コースDPループリック

### ア) 子ども学科

子ども学科における卒業時（2022年3月卒・2023年3月卒）および2023年3月1年生時の学科DP到達度（平均値（標準偏差））を表2に示す。

「A 倫理観」は2022年3月卒3.17 (.66) /2023年3月卒3.15 (.63) /2023年3月1年2.88 (.59)、  
「B 知識、技能」は2022年3月卒3.08 (.68) /2023年3月卒3.09 (.67) /2023年3月1年2.70 (.66)、  
「C 論理的で柔軟な思考と判断力」は2022年3月卒2.96 (.75) /2023年3月卒2.96 (.72) /2023年3月1年2.61 (.67)、  
「D 自己表現力」は2022年3月卒3.00 (.77) /2023年3月卒3.02 (.77) /2023年3月1年2.68 (.66)、  
「E 主体的な行動力」は2022年3月卒2.98 (.81) /2023年3月卒3.07 (.71) /2023年3月1年2.75 (.70)、  
「F 他者との協働力」は2022年3月卒3.21 (.78) /2023年3月卒3.16 (.72) /2023年3月1年2.84 (.66)、  
総ポイントは2022年3月卒18.39 (3.67) /2023年3月卒18.45 (3.70) /2023年3月1年16.46 (3.40) となった。直近の2023年3月卒業生の達成状況に着目すると、カ

テゴリーC「論理的で柔軟な思考と判断力」のみ基準（ポイント3）を以下だったものの、僅かに下回る程度（0.04ポイント）で概ねクリアしていたといえる。なお各群における $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .91 \sim .94$ となったことから、本ルーブリックの測度指標としての妥当性・信頼性の高さは示された。

群間比較のため1要因分散分析を行った結果、全カテゴリーおよび総ポイントにおいて主効果が有意となった（ $F = 7.46 \sim 15.72$ ,  $p < .001 \sim .01$ ）。多重比較（Tukey法）の結果、「E 主体的な行動力」を除き、卒業生（年度）間の差はなく、ともに1年生より高いという結果（ $p < .001 \sim .01$ ）となった。なお「E 主体的な行動力」については、2023年3月卒業生のみ1年生より有意に高い（ $p < .001$ ）という結果となった（表2）。

表2 子ども学科DPルーブリック到達度(各群平均値(SD))

各群・人数		①2022年卒 n=88	②2023年卒 n=215	③2023年1年 n=198	群間差
カ テ ゴ リ ー	A 倫理観	3.17(.66)	3.15(.63)	2.88(.59)	①・②>③
	B 知識、技能	3.08(.68)	3.09(.67)	2.70(.66)	①・②>③
	C 論理的で柔軟な思考と判断力	2.96(.75)	2.96(.72)	2.61(.67)	①・②>③
	D 自己表現力	3.00(.77)	3.02(.77)	2.68(.66)	①・②>③
	E 主体的な行動力	2.98(.81)	3.07(.71)	2.75(.70)	②>③
	F 他者との協働力	3.21(.78)	3.16(.72)	2.84(.66)	①・②>③
	総ポイント	18.39(3.67)	18.45(3.70)	16.46(3.40)	①・②>③

以上の結果から、学科DPルーブリックに示す能力や資質等が、学科専門教育での学びを通じて徐々に獲得・形成されていく過程が伺える結果となった。また各群における $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .91 \sim .94$ となったことから、本ルーブリックの測度指標としての妥当性・信頼性の高さが示された。

#### イ) キャリア育成学科オフィスワークコース

オフィスワークコースにおいては、「A 知識、技能【専門能力】」は2022年3月卒2.78(.75)/2023年3月卒2.81(.63)/2023年3月1年2.40(.70)、「B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】」は2022年3月卒2.41(.76)/2023年3月卒2.69(.68)/2023年3月1年2.43(.66)、「C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】」は2022年3月卒2.84(.63)/2023年3月卒2.81(.57)/2023年3月1年2.63(.81)、「D 主体的な行動力【アクション】」は2022年3月卒2.72(.73)/2023年3月卒2.54(.76)/2023年3月1年2.46(.74)、「E 他者との協働力【チームワーク】」は2022年3月卒2.69(.69)/2023年3月卒2.85(.61)/2023年3月1年2.74(.89)、「F キャリアデザイン【キャリア】」は2022年3月卒2.59(.76)/2023年3月卒2.81(.80)/2023年3月1年2.34(.77)、総ポイントは2022年3月卒16.03(3.17)/2023年3月卒16.50(3.17)/2023年3月1年15.00(3.45)という結果（()内は標準偏差）であり、全群・全カテゴリーで到達目標である3ポイント以下の低評価傾向にあった（表3）。なお各群における $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .83 \sim .87$ となったことから、本ルーブリックの測度指標としての妥当性・信頼性の高さは示された。

群間比較のため1要因分散分析を行った結果、「A 知識、技能【専門能力】」「F キャリアデザイン【キャリア】」において主効果が有意および有意傾向となり（ $F = 3.47$  ( $p < .05$ )・ $2.75$  ( $p < .10$ )), 多重比較（Tukey法）の結果、「A 知識、技能【専門能力】」においては卒業生間による有意差は認められず、

ともに1年生より若干高い傾向 ( $p < .10$ )、「F キャリアデザイン【キャリア】」においては2023年3月卒業生が2023年3月1年生より若干高い傾向 ( $p < .10$ ) にあった (表3)。

表3 オフィスワークコース DP ルーブリック到達度(各群平均値(SD))

各群・人数		①2022年卒 n=29	②2023年卒 n=26	③2023年1年 n=35	群間差 (Tukey)
カ テ ゴ リ ー	A 倫理観	2.78(.75)	2.81(.63)	2.40(.70)	①・②>③+
	B 知識、技能	2.41(.76)	2.69(.68)	2.43(.66)	
	C 論理的で柔軟な思考と判断力	2.84(.63)	2.81(.57)	2.63(.81)	
	D 自己表現力	2.72(.73)	2.54(.76)	2.46(.74)	
	E 主体的な行動力	2.69(.69)	2.85(.61)	2.74(.89)	
	F 他者との協働性	2.59(.76)	2.81(.80)	2.34(.77)	②>③+
総ポイント		16.03(3.17)	16.50(3.17)	15.00(3.45)	

+ $p < .10$

前回報告 (山口, 2023) においても、本コースの全般的な低評価 (到達) 傾向は指摘されており、ルーブリック基準 (記述内容) とコース学修内容との関連の薄さが原因と考えられた。子ども学科や介護福祉コースのルーブリックでは保育・介護場面を想定した所属学生にイメージしやすい内容が記載されているが、本コースのルーブリックでは、一般的なビジネス場面を想定した抽象度の高い内容が問われている。よってコースでの学修成果と結びつけた回答結果が得られにくかったことが考えられる。いずれにせよ全般的な低評価 (到達) 傾向や、学年間差 (卒業生/1年生) があまりなかった点は、本コース学修成果獲得および向上を考えた場合、大きな課題といえるだろう。

#### ウ) キャリア育成学科介護福祉コース

介護福祉コースにおいては、「A 倫理観」は2022年3月卒 2.86 (1.10) /2023年3月卒 3.00 (.61) /2023年3月1年 2.52 (.51)、「B 知識、技能」2022年3月卒 3.36 (.93) /2023年3月卒 3.12 (.70) /2023年3月1年 2.33 (.48)、「C 論理的で柔軟な思考と判断力」2022年3月卒 3.07 (1.27) /2023年3月卒 2.82 (.64) /2023年3月1年 2.38 (.50)、「D 自己表現力」2022年3月卒 3.29 (.99) /2023年3月卒 2.88 (.60) /2023年3月1年 2.33 (.48)、「E 主体的な行動力」2022年3月卒 3.21 (1.12) /2023年3月卒 2.76 (.66) /2023年3月1年 2.19 (.40)、「F 他者との協働性」2022年3月卒 3.21 (1.12) /2023年3月卒 2.88 (.70) /2023年3月1年 2.43 (.51)、総ポイント 2022年3月卒 19.00 (5.04) /2023年3月卒 17.47 (3.41) /2023年3月1年 14.19 (2.18) という結果 (内は標準偏差) となった (表4)。直近の2023年3月卒業生の結果に注目すると、「A 倫理観」「B 知識、技能」については本学が求める到達目標 (ポイント3) をクリアしていたが、「C 論理的で柔軟な思考と判断力」～「F 他者との協働性」および「総ポイント」において基準以下であった (表4)。なお各群における $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .85 \sim .94$ となった。各群人数が少ない (2022年3月卒 14名/2023年3月卒 17名/2023年3月1年 21名) ので、結果の解釈には注意が必要だが、本ルーブリックの測度指標としての妥当性・信頼性の高さは一定程度示された。

群間比較のため1要因分散分析を行った結果、「A 倫理観」以外の全カテゴリーおよび総ポイントにおいて主効果が有意となった ( $F = 3.27 \sim 10.79$  ( $p < .001 \sim .05$ ))。「A 倫理観」以外について多重比較 (Tukey法) をおこなった結果、「C 論理的で柔軟な思考と判断力」「F 他者との協働性」では2022年3月

卒業生が2023年1年生より有意に高く ( $p < .05$ )、それ以外のカテゴリーと総ポイントにおいては卒業生間の差はなかったが、ともに1年生より有意に高い ( $p < .001 \sim .05$ ) という結果となった (表4)。カテゴリーによる傾向差はあったものの、概ね卒業生が1年生よりも高い達成度を示し、コース専門教育・学修を通じた資質・能力等の向上を示す妥当な結果といえよう。一方で、直近データである2023年3月卒業生において、到達目標基準 (ポイント3) を下回るカテゴリーが全体の2/3を占めるという結果となった。各群人数の少なさを考慮すれば、達成度における個人差も結果に大きく影響した可能性も考えられる。多重比較結果から昨年度 (2022年3月) 卒業生と大きな差はなかったとはいえ、平均ポイントで下がったカテゴリーも複数みられ (表4)、本コースが専門職 (介護福祉士) 養成を主たる目的としている以上、今後の成果向上への取り組みは課題といえる。

表4 介護福祉コース DP ルーブリック到達度 (各群平均値 (SD))

下位カテゴリー		①2022年卒 n=14	②2023年卒 n=17	③2023年1年 n=21	群間差 (Tukey)
カ テ ゴ リ ー	A 倫理観	2.86 (.10)	3.00 (.61)	2.52 (.51)	
	B 知識、技能	3.36 (.93)	3.12 (.70)	2.33 (.48)	①・②>③
	C 論理的で柔軟な思考と判断力	3.07 (1.27)	2.82 (.64)	2.38 (.50)	①>③
	D 自己表現力	3.29 (.99)	2.88 (.60)	2.33 (.48)	①・②>③
	E 主体的な行動力	3.21 (1.05)	2.76 (.66)	2.19 (.40)	①・②>③
	F 他者との協働性	3.21 (1.12)	2.88 (.70)	2.43 (.51)	①>③
総ポイント		19.00 (5.04)	17.47 (3.41)	14.19 (2.18)	①・②>③

(2) DP ルーブリックの構造分析について

①全学 DP ルーブリック

前回報告 (山口, 2023) においては因子分析により、全学 DP ルーブリックの1次元構造 (≒単一的構成概念) の可能性が示唆された。しかし回答 (回収) 率の低さ、つまりサンプルの偏りという点で、構造安定性については疑問が残った。本研究では追加データも交え、あらためて検証をおこなった。

まず「全データ」に関し、探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況は「5.09, .71, .50…」と1因子解が妥当と判断された。因子寄与率も58.64%と説明率として十分であった。主因子法による因子負荷量を表5に示す。

表5 全学 DP ルーブリックの因子負荷量 (主因子法・群別)

データ群・人数・信頼性係数 ( $\alpha$ )		全データ n=538 $\alpha = .92$	2022年卒 n=125 $\alpha = .93$	2023年卒 n=215 $\alpha = .91$	2023年1年 n=198 $\alpha = .91$	子ども学科 n=399 $\alpha = .93$	オフィスワーク コース n=88 $\alpha = .89$	介護福祉 コース n=51 $\alpha = .90$
カ テ ゴ リ ー	1 いのちの平等、尊厳性への気づき	.62	.72	.54	.60	.60	.76	.51
	2 生かされていることへの感謝	.77	.73	.79	.78	.79	.76	.62
	3 倫理観	.75	.77	.73	.72	.77	.70	.70
	4 知識、技能	.83	.81	.82	.83	.83	.81	.79
	5 論理的で柔軟な思考と判断力	.83	.86	.80	.81	.84	.77	.77
	6 自己表現力	.78	.79	.76	.75	.80	.66	.76
	7 主体的な行動力	.79	.87	.77	.73	.81	.64	.86
	8 他者との協働性	.75	.74	.77	.71	.79	.62	.77

次に「卒業年・学年」別に探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況 (2022年3月卒「5.35, .69, .49…」/2023年3月卒「4.94, .78, .55…」/2023年3月1年「4.87, .78, .52…」) より、いず

れも1因子解が妥当であると判断された。因子寄与率もそれぞれ62.30%、56.55%、55.50%とばらつきはあるものの、説明率として十分な値を示した。主因子法による因子負荷量を表5に示す。

最後に「学科・コース別」に探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況（子ども学科「5.28, .68, .49」/オフィスワークコース「4.58, .93, .65」/介護福祉コース「4.70, .99, .64」）により、いずれも1因子解が妥当と判断された。因子寄与率もそれぞれ53.27%、51.30%、53.27%と説明率としてまずまずの値を示した。主因子法による因子負荷量を表5に示す。

以上、全てのデータ層において1次元構造が妥当との結果を得た。信頼係数（ $\alpha=.89\sim.93$ ）からも項目間凝集性の高さが示され、1次元構造の妥当性を支持する結果となった（表5）。よって全学DPは単一的構成概念と考えるべきであることが、あらためて確認できた。

## ②学科・コース DP ルーブリック

前回報告（山口，2023）においては、サンプル数不足により各学科・コース DP ルーブリックの構造分析ができなかった。今回はデータも追加されたので、以下の分析をおこなう。

### ア) 子ども学科 DP ルーブリック

子ども学科全データについて探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況は「4.50, .44, .34…」と1因子解が妥当であると判断された。因子寄与率も70.15%と、説明率として十分高かった。主因子法による因子負荷量を表6に示す。

表6 子ども学科 DP ルーブリックの因子負荷量（主因子法）

カテゴリー	I $\alpha=.93$
A 倫理観	.77
B 知識、技能	.83
C 論理的で柔軟な思考と判断力	.86
D 自己表現力	.84
E 主体的な行動力	.88
F 他者との協働力	.83
n=399	

確認のため、卒業生・1年生別に分析をおこなったが同様の結果となり、実施年度や学年の影響を受けにくい1次元構造の安定性を支持する結果となった。

信頼係数の高さ（ $\alpha=.93$ ）から項目間凝集性も高く（表6）、全学 DP ルーブリック同様、子ども学科 DP ルーブリックも1つのまとまった概念（例えば「保育専門性」）として学生が捉えている可能性が示された。

### イ) キャリア育成学科オフィスワークコース DP ルーブリック

オフィスワークコース全データについて探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況は「3.42, .77, .56…」と1因子解が妥当であると判断された。因子寄与率は48.64%とやや低いが、まずまずの説明率といえよう。主因子法による因子負荷量を表7に示す。確認のため、卒業生・1年生別に分析をおこなったが、同様の結果となった。

表7 オフィスワークコース DP ルーブリックの因子負荷量（主因子法）

カテゴリー	I $\alpha=.85$
A 知識・技能【専門能力】	.67
B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】	.70
C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】	.71
D 主体的な行動力【アクション】	.77
E 他者との協働力【チームワーク】	.74
F キャリアデザイン【キャリア】	.58
n=88	



信頼係数の高さ ( $\alpha=.85$ ) から項目間凝集性も高く、全学 DP ルーブリック、子ども学科 DP ルーブリック同様、1つのまとまった概念 (例えば「オフィスワーカー専門性」) として学生が捉えている可能性が示された。

#### ウ) キャリア育成学科介護福祉コース DP ルーブリック

介護福祉コース全データについて探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況は「3.42, .77, .56…」と1因子解が妥当であると判断された。因子寄与率は48.64%とやや低いが、まずまずの説明率といえよう。主因子法による因子負荷量を表8に示す。なお、本コースでは

表8 介護福祉コース DP ルーブリックの因子負荷量 (主因子法)

カテゴリー	I $\alpha=.91$
A 倫理観	.69
B 知識、技能	.88
C 論理的で柔軟な思考と判断力	.76
D 自己表現力	.78
E 主体的な行動力	.84
F 他者との協働力	.81
	n=51

各群データ数が少なく (2022年3月卒13名/2023年3月卒17名/2023年3月1年21名)、分析結果の安定性に問題が生じるため、集団別の分析はおこなっていない。

信頼係数の高さ ( $\alpha=.91$ ) から項目間凝集性も高く、全学 DP ルーブリック、他学科・コース DP ルーブリック同様、1つのまとまった概念 (例えば「介護専門性」) として学生が捉えている可能性が示唆された。

## 4. まとめと今後に向けた課題

本研究では、前回報告 (山口, 2023) をふまえ、追加データ (2023年3月卒業生・1年生) を交えた分析や検証をおこなった。内容としては、全学 DP ルーブリックおよび学科・コース DP ルーブリック到達度の卒業年度・学年による比較、そして各ルーブリックの構造分析 (因子分析) であった。

まず全学 DP ルーブリックの到達度については、学年による向上はみられたものの、本学の設定した卒業時達成基準を満たしていないカテゴリーも散見された。大まかには仏教精神に関連するカテゴリーに比べ、学んだ知識や技能の実践的な活用、論理的思考力やコミュニケーション力、主体的行動力などいわゆる「社会人基礎力」に相当するカテゴリーにおいて低評価 (到達度) の傾向にあった。地域の高等教育機関として、上記問題の解消・改善に向け取り組むべきことはいうまでもなく、例えば教養系科目の拡充が考えられる。しかし本学は短期大学・専門職養成校であり、時間割上も制約がある点も考慮すれば、現状カリキュラムにおいて、低評価だったカテゴリーに関連するような学修活動の要素を意識的に取り入れるなどの方策も考えられる。まず学内 (外) 教員に向け、現状を伝え、今後の改善に向けたコンセンサス形成に努めたい。

各学科・コース DP ルーブリックの到達状況については、全学 DP ルーブリックに比べ、学科・コースにおける傾向の違いが感じられる結果となった。子ども学科については、学年による到達度向上や基準達成を確認できたが、キャリア育成学科については両コースとも今後の改善を要する結果となった。基準に満たなかった (低評価だった) カテゴリーを中心に、授業・教育指導のさらなる充実や関連学修

の機会の提供等、取り組みが必要である。そのような意味において、本研究で得られた知見を大学へ適切な形でフィードバックしていく必要もあるだろう。

ルーブリックの構造分析に関しては、全ルーブリックにおける一次元性が、おおよそ確認できたといえる。前回報告（山口，2023）では、データ数の少なさ・サンプルの偏りから多次元性の可能性も考えられたが、本研究は（学科・コース DP ルーブリックの構造分析も含め）、前回研究上の課題や疑問に応えられたという点で有意義といえる。しかし今回においても、データ数制約上、介護福祉コースで詳細分析ができず、明確さを欠く結果となった。サンプル数の少なさ・偏りについては、各ルーブリック達成度の検証についても影響するので、今後さらにデータを蓄積し、あらためて分析・検討を試みたい。また本来ルーブリックは、パフォーマンス（成果）を複合的視点から評価する多次元的なものとされる（松下，2012）。この点については、本学ルーブリックが学生による自己回答式であったことが要因として考えられる。例えば抽象度の高い記述語（レベル）が設定されていると、学生にとっては「よくわからないが何か大切なこと」などと表層的に解釈され、各カテゴリー区別なく一律に評価された可能性も考えられる。本研究の分析結果では、基準達成度においてカテゴリー間の差も一定程度示されたが、「幅広い観点から学修成果を捉える指標」として、各ルーブリックが機能しているのか、記述語表現の妥当性も含め、検討・改善を要すると考える。加えて、本学ルーブリックが、学生において具体的に理解できているのかに関する調査も必要であろう。例えば、ルーブリック調査の際、記述語の意味や内容を理解できたか、記述語の内容が各カテゴリーをどれくらい反映していると感じられたか評定させるなど、追加項目を設ける等の工夫が考えられる。

#### 【註】

- 1 学修成果に関連するルーブリックについては、学びを通じた特定の能力獲得や成果達成等に関する形成的評価をおこなうもので、このような比較については批判的な考えもあるかもしれない。しかし沖（2019）は、他集団や過年度学修者との比較を通じた教育改善の可能性（有用性）について述べている。
- 2 本学が採用している DP ルーブリックでは、「レベル0～3」の水準設定がなされており、学生には到達目標「レベル2」として提示している。本研究での分析では各回答は1～4のポイントとして割り振られており、到達目標は「3」にあたる。
- 3 「やわらか心」とは、本学では「私たちがものを見るときは、自分のものさしではかって優劣をつけ、好き嫌いを必ず言います。しかし、それは、自分の立場から見た、一方的な見方に過ぎません。すべてのものは、本来、優劣や上下などなく、それぞれがそれぞれの光を放って、光り輝いて存在しています。光り輝くそれらの個性を、『みんなちがって、みんないい』（金子みすゞ）とすべて受け入れることのできる、和らいだおらかな心、それが『やわらか心』です」と定義されている（本学HPより）。
- 4 仏教精神に関連するカテゴリー「2 生かされていることへの感謝」も（前年度卒業生とは異なり）基準をクリアしていなかった。しかし前年度卒業生との有意差はみられず、傾向としての違いは認め

られなかったといえる。

## 引用文献

松下佳代. パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて. 京都大学高等教育研究. 2012, 18, pp.75-114.

溝口 侑・小山 理子. ディプロマ・ポリシー達成度を評価するルーブリックの開発, 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 2020, 58, pp.191-203.

沖 裕貴. 特集 ルーブリックとは何か. 物理教育, 2019, 67(2), pp.101-104.

山口昌澄. 「高田短期大学ディプロマ・ポリシー」到達度に関する研究, 高田短期大学, 2023, 41, pp.13-24.

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、データ提供にご協力いただきました本学学生・卒業生の皆様には、心より感謝申し上げます。